



# 京都生協 「第3回海の虹プロジェクト」開催 南三陸の中学生へ「つながる力」を伝える

京都生協は、2011年6月以来、職員ボランティアが中心になって、宮城県南三陸町の支援に継続して取り組んでいます。南三陸町の中学生を夏休みに京都へ招き、励ましていこう、自分の力に気付く機会にしてみようという目的で始まった「海の虹プロジェクト」も3回目の開催。今年も同町の二つの中学校の生徒29人が参加しました。



11時間かけて南三陸から  
バスで京都へ

8月8日の朝、南三陸町をバスで出発した「海の虹プロジェクト」に参加する中学生たちは同日夜、京都府舞鶴市グリーンスポーツセンターに到着し、京都生協の組合員ボランティアが用意した夕食をいただきます。9日朝、バスで綾部市志賀郷公民館の多目的ホールに到着。この日は志賀郷の豊かな里山に入る予定でしたが、雨天で台風の影響も予想されたため中止に。「海の虹プロジェクト」の実施にあたり、窓口を担った、農家でこの地域のリーダー的存在の井上吉夫さんを囲んで、これから何をやるかミーティングしました。

話し合いの結果、卓球やバドミントンで参加者同士で交流したり、友達とおしゃべりする子が多い中、何人かの女子は調理室で小麦粉をこねるところからパン作りにチャレンジしました。こねた小麦粉はロケットストーブで焼き上げます。ふっくらと膨らんだパンの出来栄えに女の子たちは嬉しそうです。

昼食にはこのパンと一緒に鳥取県のB級グルメ、ホルモン焼きそばが振る舞われました。京都生協職員



ロケットストーブでふっくら焼き上げたパンにご満悦の中学生。

ボランティアと、いつも一緒に支援に取り組む鳥取県畜産農協の橋本幸雄専務はこの日も早朝から、たくさんのお食料をワゴン車に積んでいます。「もう、来るのは当たり前前」と笑います。

## 雨上がりのお寺で復興を祈念 住職も一人ひとりを思い祈禱

昼食後はホールで、紙飛行機の飛距離や滞空時間を競うゲームで腹ごなし。綾部市の「かんばやし紙ヒコキ倶楽部」葛目光男さんの指導で、遠くへ飛ばイカヒコキ、長く飛ばヘソヒコキを大人も交じって真剣な表情で作成します。特に男子の真剣度は相当で、その姿に、この日を楽しみにしていたという葛目さんは目を細め「一枚の

※ まき・廃木材などを効率よく燃やす調理用ストーブ(こんろ)。多くは手作りで作られ、ここではパール缶で組み立てたものを使用した。



紙で遊べる紙飛行機は工夫次第でもっとよくなる、これからも楽しんでほしい」と話しました。

折よく、このタイミングで雨が上がり、一行は復興を祈念するため、



輪に向かって紙飛行機を投げるフォームも決まっています。



焼きあがったピザを地元の子に配る中学生。

近くの長福寺というお寺にお参りに行きました。観音堂で中学生を迎えた住職は、陸前高田の一本松で作った数珠を手に、参加者一人ひとりの名前を織り込んだ祈祷をされました。

「生きるということは、誰かに借りをつくること。生きていくということとは誰かに借りを返すということ。頭で返すか、体で返すか、できることで誰彼構わず返すのが人の世であらうと思います」

住職からお守りを手渡された中学生は神妙な面持ちで、小さなお寺の境内には晩蟬の鳴き声が響いていました。

## 過疎化した町と被災した町の子とのつながる力

この後は地元志賀郷の方を招いての夕食会。中学生はピザとラタトゥイユ（野菜煮込み）づくりにチャレンジです。京都生協のボランティアと野菜の下ごしらえをしたり、小麦粉をこね、ピザにはたっぷりのチーズをのせます。

京都生協職員の高校生のお子さんは、前回の参加者とLINEでつながっていて、もっと交流したいとの思いから、今年も親子でボランティア

アに参加したそうです。

ロケットストープで次々に焼かれたピザもふくらもちもちしていて、どんな店で買ったものにも負けないほどの出来栄え。中学生たちは、そのピザを切り分けると、誰に言われるともなく地元の子どもたちにも配り、この日民泊するホストファミリーと夕食をいただきました。他にも鳥取県畜産農協によるパーベキューと地元の野菜たっぷりのみそ汁が振る舞われました。同じものを食べることで少しずつお互いの緊張が解けていく夕べ。後片付けが済むと、それぞれのお宅に向けて車で集会所を後にしました。

今回のプロジェクトに先立つこと



京都府綾部市志賀郷の公民館に隣接する建物で、中学生たちと談笑する地元農家の井上吉夫さん（右端）。井上さん宅にはこの日5人の男の子が宿泊しました。

2カ月、企画会議の席上で井上さんは言いました。「昨年は57人の中学生を受け入れることができたが、もっと一人ひとりと向き合って交流できれば良かった。今年は年賀状のやり取りをするくらいの関係構築しよう」

昨年は日中だけの交流だったけど、今回は志賀郷のみならず、中学生の宿泊を受け入れよう。その呼びかけは町内放送を通じて行なわれました。80歳を超える坂根さんが名乗りを上げると、2回目の放送で9軒の宿泊先が決まり、井上さんは5人の中学生の宿泊を受け持ちました。

一晩を京都の里山のそれぞれの家庭で過ごし、翌朝、集合に最後に現れたグループは、途中で仕掛けたわなにかかったイノシシを見せてもらったと少し興奮気味。降りしきる雨の中、次の目的地へ向かうバスに乗り込む中学生を見送るたくさん顔にも充実感がありました。これからの復興の担い手である子どもたちを応援しようと始まったプロジェクトですが、誰かを支援することは、その力があることに気付く機会でもあることを、プロジェクトに関わったすべての人が実感する夏の日となりました。

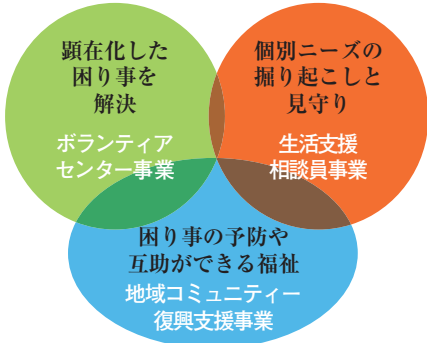
# 震災を経験して分かった 地域にあり続ける存在 としての役割と使命

釜石市社会福祉協議会（以下、社協）「生活ご安心センター」は、地域コミュニティの復興を目指し支援活動を行っています。前回に引き続き、副センター長の菊池亮さんに地域における社協の役割についてお話を伺いました。

## ——復興に求められる

### 「生活ご安心センター」の役割

津波浸水エリアにあった町内の人はみんな各地に散らばってしまいました。どこに誰が住んでいるのか、行政も情報を出せない中、町内会の会長さんは、みんなに声掛けをして元の地区をもう一度つくり直してほしいとか、町内会を維持するために働いてほしいとか周りから言われますが、会長さん自身も被災者ですし、対応し切れません。



釜石社協「生活ご安心センター」三つの事業

私たちは被災者がどこに住んでいるか、訪問活動などで分かっているの、地域の集まりのご案内とかお知らせのお手伝いをしていきます。集まれる人たちが情報交換できる場をつくっていくことが、数年先戻ってくる人たちとつながるきっかけになると考えています。

釜石社協「生活ご安心センター」の事業の一つであるボランティアセンターは、従来からお茶っこサロンなど、地域の交流の場づくりのお手伝いをしています。この活動だけでは孤立した人全てには支援の手が届きません。そこをカバーするのが生活支援相談員事業で、社協の職員が各地区を回ってお変わりないか、困り事がないかお伺いしています。それでも孤立死の防止などは専門の職員だけが頑張っても限界があるので、隣近所の力、コミュニティの再生が必要だということ、人をつないでいく地域コミュニティ復興支援事業に取り組んでいるのです。



釜石市社会福祉協議会  
地域福祉課  
「生活ご安心センター」  
菊池 亮さん

——震災によって地域との関わり方を再認識した

今回の震災によって、本当の意味での地域福祉に必要なことに気付かされました。社協の主な役割の一つである地域づくりにしても、今回の震災があつて、随分地域のニーズを掘り起こすことができました。また、戸別訪問する相談員の働きは大きく、社協の知名度も高まりました。さらにコミュニティの復興支援事業で自治会長や民生委員さんたちと関わることで、だいぶ社協の職員が地域の中に入っていけるようになりました。

少ないながら民間の助成金などの活動資金を持つてくるなど、社協ができることがだんだん知られ、住民からの問い合わせも増えてきました。震災が契機ではあります。これからもずっと地域にあり続ける存在として社協の役割が大きいと再認識しました。

## ——普段からの心構えと準備

個人としては、まず発災後3日間は自力で生き残る準備が必要だと感じまし

た。自助ができた人間が支援を考えられると思うのです。

民間の社会福祉法人である社協も警戒報が出れば、自宅待機や事務所集合が求められます。気持ちの整理がつかなくても、現実問題として発災したらやれる人間でやるしかないので。「やれること」「やれる人」を増やすためには普段の取り組みが大切です。

社協としては、行政とのつながりがあることが強みの一つです。私たちのボランティアセンターが行政からのほとんどの要請を受けることができたのは、各課に誰がいて、何をやっているかを分かっていたからです。地域に根差した社協では、地域のキーマンの所在や要介護者のくらしぶりまで把握しています。普段の取り組みの中でどれだけのネットワークをつくれるかが、いざというときに生きてきます。



取材日に行なわれた釜石社協と法政大学現代福祉学部の学生とのランチミーティング。同社協では、支援の担い手との情報交換と連携を重視している。